



0000.00
OPEN!!

湯川リウマチ内科クリニック
リウマチ科/内科
0422-31-1155
武蔵野市境南町 3-14-6 山桃ビル 3F

湯川 宗之助 院長



2000年東京医科大学卒業。同大第三内科に入局し8年間リウマチと膠原病の診療に従事。その後、リウマチ・膠原病の権威である田中良哉氏が教鞭を執る産業医科大学医学部第一内科に入る。日本リウマチ学会専門医・評議員。2015年開業。モットーは「心のある医療」。



時代の流れもあるのか、新しいクリニックほど、患者ニーズを設計コンセプトに反映しているところが多いようです。そんな工夫あふれる新規開院クリニックを訪ね、快適な空間づくりのヒントを余すところなくご紹介します。

人を尊重したクリニックづくりで 誰もが心地良い空間をめざす

関 節リウマチ・膠原病を 専門とする湯川宗之助先生が平成27年2月に開院した『湯川リウマチ内科クリニック』。生物学的製剤の登場により、リウマチ治療はこ

こ10年で劇的な進歩を遂げ、今では寛解もめざせるようになったが、正確な知識を持った患者はまだ少ない。リウマチの早期発見と適切な治療を一人でも多くの患者に提供したいという高い志を持ち、自らの名を冠した医院をつくりあげた湯川先生。患者にとっては治療を受ける場所として、スタッフにとっては働く場所として、クリニックが居心地の良い空間であるようにと願い、院内の至る所に

その思いを宿した。

自身の経験と 患者の不安を重ね 真のニーズを把握

例えば、関節リウマチという原因不明の病気への恐怖や不安、定期的に通院しなければいけない精神的苦痛を少しでも和らげるため、待合室は空港ラウンジのようなゆとりある空間に設計した。実は高所恐怖症の湯川院長が、飛行機を利用した際、搭乗前の緊張感を和らげてくれたのが空港のラウンジだったことから、患者がくつろげるようにと考え出したそう。自分が不安だった時の気持ちと、患者の不安とを重ねて感じられる、その

圧倒的な想像力が、人に優しい空間を生み出している。

また、スタッフへの配慮がこまやかな点も特徴的。スタッフたちがどんな心で働いているかが大事で、巡り巡ってそれが患者への対応にもつながると考えているからだ。

患者やスタッフの気持ちを考え抜き、計算し尽くしたクリニックづくりを実現したのは、おそらく先生自身も気付いていない人間力の高さ、卓越した「思いを形にする」行動力が相まってのことだろう。「患者さんに人生があるように、スタッフにもそれぞれの人生がある」。湯川院長の言葉が印象的だ。

pick up 03 掃除のしやすさを考えて 掃除機の高さに合わせて作った椅子



診療以外のことでスタッフに努力をかけないようにと、ロボット掃除機を導入。なんと、その掃除機が待合室の椅子の下にも入るよう、あらかじめ計算して設置したというから驚きだ。絨毯による温かみと清潔さを両方かなえている。

pick up 04 扉の開閉にもこだわった 清潔感溢れるパウダールーム



清潔感のあるトイレは広々とした作りで、まさに「パウダールーム」という呼び方がぴったりな空間。関節リウマチの患者は、手に痛みや腫れがあり、思うように力が入らないことが多いため、軽い力で開けられる扉を採用している。

pick up 05 スタッフ教育と勉強会

開院前に講師を招いて接遇の研修会を開くなど、スタッフ教育を重視。現在も、定期的に休休中に勉強会を開いている。「来ていただいた方に丁寧に接するのは当然のことですが、自分の思う当たり前が他者にとっての当たり前とは限らないからこそ、第三者による勉強会が必要だと思ったんです」と院長。

pick up 01 休み時間を快適に過ごすための 日当たりの良いスタッフルーム



冷蔵庫・洗濯機・電子レンジ・テレビを完備。白を基調としながら、ビタミンカラーのオレンジを取り入れた室内は明るい印象だ。短い休憩時間を快適に過ごせるようにと、院内で最も日当たりの良い場所をスタッフルームに充てたという。

pick up 02 患者に正しい知識を伝えるために 待合室のモニターで自作の映像を流す



「関節リウマチという病気を正しく知ってもらいたい」との強い思いから、リウマチに関する自作の映像を流している。クイズ形式で解説しており、わかりやすいと患者にも好評だそう。待合室には病気に関連するパンフレットも多数設置。

